

豊橋市立保育園事例検討会についての報告と考察

— “音楽リズム”の指導について考える—

井 中 あけみ

豊橋市立「くるみ保育園」にて、平成18年10月24日(火)「公立保育園事例検討会」が行われ、指導・助言者として参加する機会を得た。このような事例検討会は豊橋市において数少ない取り組みであり、今後の発展を期待してその概要を報告するとともに、若干の考察を加える。

【参加者】

豊橋市役所保育課……………1名
豊橋市立保育園保育士……………5名
豊橋市立「くるみ保育園」保育士
(園長含む)……………7名
豊橋創造大学短期大学部……………1名

【テーマ】

「生き生きとリズム遊びをするために」
(動物になって遊ぼう)

【ねらい】

2歳児の音楽リズムの指導法の研究。身体能力の発育促進と子供たちの表現豊かな身体表現を目的とし、精神的にまた肉体的にのびのびとした園生活を行うための方法の一つとして実践したものを報告し、2歳児の子供の心身の発達を知り、リズム遊びを通して子供たちの成長を探っていく。

実践内容

1. 季節の歌や子供たちの好きな歌や手遊びをする。

- ①季節の歌を楽しむ。

「チューリップ」「ちょうちょ」
「こいのぼり」

- ②子どもたちの好きな歌を歌う。

「ぞうさん」「わにのうた」
「かえるのうた」

- ③手遊びをする。

「はじまるよ」「キャベツの中から」
「パンダうさぎコアラ」

①と②と③では、それぞれの趣旨による曲目選択の区別がはっきりしており、大変わかりやすい。①は時代を問わず歌い継がれているものであり、②は子どもの興味のある度合いが、動物にあることを表している。また③については「手遊び」という言葉遊びが中心となることから、新しい歌が採り上げられている。これについては詳しい報告はなく、「リズム遊び」への導入に用いられているものである。

2. リズム遊びや表現あそびをする。

- ①ピアノに合わせ、歩いたり走ったりする。
- ②身近な動物になって遊ぶ。
- ③表現遊びが苦手な子の事例。

※この実践事例については以下に具体的に報告する。

具体的な事例の報告

1. [事例1]

音を聴いて表現する楽しさを味わう

指導者……1～3人 ピアノ……1人

下記の表は、事例検討会用に作成された

ものであり、ここでは内容をそのまま紹介する。尚左端の欄に記載されたA・B・C等と、表の中の各横線については、この表をより分かりやすいものとするため、ここで新たに付け加えたものである。

	保育士の言葉がけ	子どもの姿	援助のポイント
A	「どんな曲かな？」 「さあ、歩いてみよう。」 曲を口ずさむ。	曲を意識して歩く。	行進曲を弾く。 行進曲、停止の合図などは、あらかじめ決めておき、一定の曲にする。
B	「速くなってきたよ。走るよ。」 「わー、すごい〇〇くん速い。飛行機みたい。」	曲の変化に気づき走る子 まったく変化に気づかない子。	子どもたちが落ち着き、流れが少し出てきたところで、少しずつテンポを速くする。
C	“ジャジャー”の合図 「寝るよ。」「シュー」 「いっぱい走ったから、力をためておくだよ。〇〇ちゃんと〇〇ちゃんは、力がたまってきているね。」	寝転ぶ。 立ち尽くしてしまったり、座ったままの子もいる。	子守唄の曲を弾き、心を休め、落ち着かせるようにする。 無理に寝かせたりしないように見守る。
A	「また、音が聞こえてきたよ。」 「そうそう、〇〇ちゃん、元気に歩いているね。」	喜んで歩き出す。 手をふって力強く歩き始める。	行進曲を弾く。 いきいきと歩けるような言葉がけをする。
B	「あ、今度は違う音に変わってきたよ。」 「そうそう、怪獣みたいだね。」 「ゆっくりな音だね。」 「くまさんもいるね。」	次にどんな変化があるか、楽しみにしている子もいる。 (保育士の動きをよく見ている。) 怪獣になったりし、大またでゆっくり歩く。 普通に歩いている子もいる。	低音でゆっくり弾く。 保育士がすぐには動作せず、子どもの様子を見る。 ヒントになる言葉がけをする。
A	「またまた音が変わったよ。よく聞いてみてごらん。」 「そうそう、歩こう、歩こう。」	元気よく歩き出す。 ほっとした表情を見せる子もいる。	行進曲を弾く。
B	「かわいい音だね。跳ねてみよう。」 「〇〇ちゃん、うさぎさんみたいになったね。」	うさぎになって跳ねる。 小走りに走る。 動きながら「面白いね。」などと言う。	高音でリズムカルに弾く。 保育士もいっしょに表現することを楽しむ。

C ↓ A	“ジャジャー”の合図。 「寝るよ。」 「さあ、この音は何だっけ。」	喜んで寝転ぶ子、ふざけて しまう子もいる。 不安そうな顔をしている子 もいる。	気持ちが開放されておらず、 寝転ぶという動作まで行か ない子もいるので様子を見 守るようにする。
A	曲を口ずさむ。	安心して歩き出す。	行進曲を弾く。
B	「この音は……怪獣さんがい っぱいだ。」 「くまさんも強そう。」 「あ、速くなってきた。」 「走るよ。速く、速く、新幹 線くらい速いよ。」	歩きながら保育士の顔をよ く見ている。 自信を持って力強く歩く子 もいる。 喜んで怖そうな顔をしてい る。 音にあわせて走り出す。 よそ見していた子も真剣に 走り出す。	落ち着いてきたところで曲 に変化をもたせていく。 低音でゆっくり弾く。 子どもたちが表現している 姿を真似したりして、楽し めるようにしていく。 身近なものに例えて、表現 しやすい言葉がけをする。
C	“ジャジャー”の合図 「寝ると、力がたまってくる よ。しー。」	寝転ぶ。 ごそごそ動いて場所を移動 している子もいる。 真剣に目を閉じようとする。	けがないように注意をは らう。 保育士も隣で眠り、安心し て体を横になれるようにす る。
	「起きよ、起きよ、くま組み のお友だち。」 「元気になったから、動物に なって、お部屋に帰ろうか。 どんな動物でもいいよ。」 「○○ちゃんはどうさぎなの。 かわいいね。」 「先生はぞうさんになろうか な。」	「はーい」と言って起きる。 「○○はうさぎ。○○は怪獣。 ○○はかえる。○○は飛行 機。」 自分で考えてなりきってい る子もいる。 他児がやる姿を見て、やっ てみようとする子もいる。	子どもからの言葉に同意し て安心して表現できるよう にする。 ○○になりたい、という気 持ちは大切にしていく。

事例1は、保育士の発信（保育士の言葉がけ）によって子どもの行動（子どもの姿）が見られるタイプのものである。ここでは保育士の働きかけが、大きく3つのパターンに分類されていると言えるであろう。

A：テーマ曲の提示

この事例のテーマソングである「行進曲」で、繰り返し提示することにより、「音楽を聴く」体制を整える。

B：テーマ曲の発展

Aに緩急をつけたり、リズムのバリエーションをする。

C：静止の状態

子守唄や静かな音で落ち着かせる。

Aに関しては、最も動きの取りやすい行進というパターンを用い、動作も導入にふさわしい誰にでもできる「歩く」というモチーフで子どもの体のリズムを整えている。

Bでは展開・発展を試みており、曲が変化することで（緩→急 or 急→緩 等）個々のイメージが広がりを見せる。この部分では最も個人差が現れ、Aの誰にでもできる行進とのずれが大きな特徴となるであろう。

CはAからBへの動きが大きな変化を起こし、緊張と興奮のクライマックスを向かえた後に必要な静の状態のことである。この静の状態で緊張を開放（満足感）へと導いていくことは、音楽の基本ともいえる構造で構成されているといえよう。

この事例1ではここに述べたA・B・Cの繰り返しだが、子どもの関心度の変化と共に適度に繰り返されており、時間も約10分間という2歳児の集中力の範囲内で行われていることなどから、大変子どもにとって消化しやすいプログラムであるといえよう。子どもの興味の度合いの高い動物や乗り物などをイメージさせ、指導者がそれぞれの動きの速度やリズムを提供していくところなどは、保育士の語りかけや観察力が重要であり、特にすぐに順応できない子どもたちがどのような過程を経て動きを身につけていくのかは、今後音楽リズムを学習していくにおいての、貴重な資料となるものである。

改善点としては、この表の記録方法に若干あると考えられる。〈援助のポイント〉の部分に「指導のポイント」と「指導項目」が同時に記載されており、分かりづらいつと思われる。むしろ表の左端に「指導項目」を記載し、どのような過程で指導が進められていくかを提示することが望ましい。

2. [事例2]

身近な動物になって遊ぶI
(散歩にでかけよう)

- ①どんな動物に出会うのか。
- ②その動物がどんな食べ物を食べるのか。
- ③どのような食べ方をするのか。
- ④その動物はどのようなリズムや速度が適しているのか。

これは、室内にいながら野外をイメージするという、いわば「イメージ学習」である。保育士は子どもからの発信を大切にし、そこからさらに広がりを持てるようサポートしていけることが理想である。さらにこのような場面では、発想の個人差や個性がかなり顕著に現れることから、場面の切り替えなども大切な項目となるであろう。

この事例2では「…魔法をかけるよ。」などの語りかけをもちいて工夫がされている。またここでは、自然や生き物についての学習も同時に行われており、音楽に苦手意識を持っている子どもも、この活動に参加しているという意識が持ちやすくなるのではないであろうか。その意味からも身近な動物を題材にすることは、大変意義のあることである。

さらに日頃行っている「ごっこ遊び」や「つもり遊び」がここに織り込まれており、動物になったつもりの動作などが具体的に示されている。

また生活の三要素である「衣・食・住」の中の最も子どもが理解しやすい「食」を用い、自然の中での「食」の動作を「音楽リズム」で表現している。

3. [事例3]

身近な動物になって遊ぶⅡ

（カエルになって遊ぶ）

- ①カエルのお面作り
- ②カエルになって遊ぶ
- ③カエルの冒険ごっこ

①では、カエルの顔が仕上がっていく段階でピアノ演奏を入れ、カエルの雰囲気を高めていく。

②では、実際にアマガエルを飼育ケースで飼い、蚊などのエサを食べる姿や泳ぐ姿跳ぶ姿を観察した。新聞紙を破り水に見立ててビニールプールの中に入れていく。「カエルのうた」を歌い、飛び跳ねたりピョンピョンしながらカエルになっていく。

③では、カエルの動作だけでなく、ストーリー性を持って世界を広げていった。その展開の結びでは、「運動遊び」を行い、体育器具（平均台・マット・跳び箱）で体を動かし、散歩のほどよい疲れと満足感を味わう。（運動会への導入）

どの場面においても「イメージ」のトレーニングがなされており、それを発展・展開させていくことで、表現の形が完成されていくようである。

この事例3では、表現あそびがより表現しやすくなるよう、具体的に認識しようと試みがなされ、その創作の過程でさまざまな工夫がなされている。

4. [事例4]

表現遊びが苦手な子への対応

4月5月当初に全く表現遊びに参加できなかったA子についての成長過程が、記録され、報告された。

「表現遊び」「リズム遊び」を行うことで、A子が日頃生活面で保育士との関わりを持っていなかったことに気が付いた。

保育士の方からさりげなくA子に話しかけたり、一緒に遊んだりする機会を増やしていった。

「お面作り」の際には、A子の好きなうさぎのぬいぐるみから、うさぎのお面作りをし、結果他の子どもたちと一緒にリズム遊びを行えるようになった。（うさぎのリズムでピアノを弾く等）

さらにA子に共感したり、言葉がけを増やすことによって、保育士とA子の関係は良くなっていった。

感想と評価

今回の事例では、子どもの身体機能の発達や心身の発達が中心になって研究がなされており、保育現場での取り組みとしては非常に分かりやすく、意味のあるものであった。

特に保育士が、決められた音楽で決められた動き（リズム）を提供するのではなく、子どもの生命の中にあるそのままの躍動感を、できるだけ自然に引き出せるよう努力されているところにこの研究の魅力が感じられる。また子どもたちが音楽を聞いて呼び覚まされた感情を、身体の動きを通して表現しやすいよう導いたり、方向付けたり子ども本来の素材をできるだけ大切に扱っていくところに、重要な価値があるものと

考えられる。

実際この事例の記録の時期よりも2・3ヶ月の後に、この指導を見学したところ、子どもたちは全員がそれぞれの表現でかなり高い集中力を持って参加していた。このことから、この指導の成果は十分にあったといえよう。さらに見逃してはならないことは、この指導を行っていく過程で、常に保育士が「子どもの心身の発達」について試行錯誤の研究を繰り返してきたことである。今後日常の保育の中でのコミュニケーションやスキンシップをないがしろにせず、個々の姿をしつかりと観察し、保育士と子どもとの信頼関係を構築することに惜しみない努力を続けていかれることであろう。

改善点に関しては、事例2と、具体的に身近な動物としてカエルを取り上げた事例3の位置づけを明確にし、どの時期にどの事例をプログラムするのかといった、子どもにとまどいや成長の段階を整理し、もう一度構成し直す必要があるのではなかろうか。これも来年度に向けての課題の一つとなるはずである。

考 察

今後の保育現場での「音楽リズム」のあり方について

日頃間違った既成概念からか、「音楽リズム」というと、与えられた音楽に動きを合わせたりする、型にはまった動きのものを想像しがちである。コダーイやオルフやダルクローズのメソッドを、彼らの民族的文化背景を理解せず、闇雲に日本の保育現

場に用いることの不安は、かつてから危惧されてきたことである。それについては、大宮真琴氏と徳丸吉彦氏も『幼児と音楽』(1985)に「日本の、しかも幼児教育におけるリトミックのありかたは、かなり慎重に検討されなければならないでしょう。」といている。

また学校教育基本法の中に「音楽リズム」という語をおりこんだ、つまり「音楽リズム」の生みの親である坂元彦太郎氏によると、「音楽リズムの理念」は「行進やおゆうぎの伴奏音楽のリズムパターンに、幼児の身体の動きをあわせることは、リズム教育の本質ではない。」と主張している¹⁾。

子どものリズム教育は遊びの中で、たとえば民族的なリズムやその他学習で得たリズムの形をバランスよく調和して、目的に応じて表現されるべきではなかろうか。固定された音楽やリズムパターンにせざるごとく、身体活動や言語活動の中にも子どものリズムは生産されており、自発的に遊びを通してリズムを楽しんでいる子どもの姿に我々はずっと目を向け、そこに大いに学ぶ必要がある。

『子どもの発達と音楽』の中で、笈三智子氏は「身体のリズムは子どもの身体の成長ばかりでなく、全発達を支えるものである」と述べている²⁾。子どもの音楽的発達は身体運動、歌唱や楽器演奏などに分かれていくが、音楽以前の段階としての身体のリズムは、その後の音楽活動の基礎となっていくのである³⁾。その意味からも今回の事例を起点とし、子どもがさらに音楽と表現で、生まれながら内在している力を引き

1) 大宮真琴・徳丸吉彦編『幼児と音楽』有斐閣選書1985年

2) 笈三智子著『子どもの発達と音楽』音楽之友社

3) 『幼児と音楽』 p.148

出せるよう保育士や研究者がさらに検討を続けるべきである。

最近の子どもたちに関わる社会問題は深刻化している。0歳から6歳までの保育内容に音楽は大きな存在価値があるといっても過言ではない。むしろその時期を広い意味での「身体のリズム表現」と置き換えることもできるのではなかろうか。我々は子どもの言葉・運動などそれぞれの発達段階を注意深く観察し、その中から表現される「基本的な音楽」で、子どもがバランスよく成長できるように、また精神の安定と心の豊かさを蓄えられるようなカリキュラムを研究していかなければならないと考える。さらに今後保育現場と教員養成機関が共通意識を持って、より良い保育のあり方を追求し、より良い保育士を育成し、今後の保育の発展に貢献しなければならないと共に、保育現場でのこのような取り組みが発展していくことに期待している。